日本のオペラ公演2014
──公演データの分析とその考察──

『日本のオペラ年鑑』編纂委員会・石 田 麻 子

1. はじめに【表1】

『日本のオペラ年鑑2014』は、1995年版の発行開始から20冊目となる。2014年にはどんな傾向が現れたのか、20年という節目の年でもあることを意識しつつ、この稿では例年同様の分析手法をとりながら考察してみたい。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（演奏会形式等の公演）の区分

本年鑑では、全てのオペラ公演を、756席以上の大規模会場をA表に、756席未満の中・小規模会場をB表に、それぞれ区分して分析している。これは、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの客席数である756席を基準として、それ以上をA表：大規模会場に、756席に満たないものをB表：中・小規模会場に分類したものである。オペラ劇場としての機能を備えた同ホールは、一定規模の公演を実施するために必要な条件を備えていると考え、比較的大型の公演とそれ以外のものを便宜的に分けるために、『日本のオペラ年鑑』編纂委員会での検討を経て、設けた基準である。ただし、学校の体育館などでの公演は、オペラ公演や演奏会開催を主目的としない会場であり、これらは座席数にかかわらず中・小規模公演に分類している。

また、演奏会形式・ハイライト公演といった本来の上演形式とは異なる公演形態のものをC表として、巻末の資料編に掲載しているのも例年どおりである。また、今年もC表公演に関する若干の分析を「6. 演奏会形式など」の項で行った。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類について）

オペラ団体のみならず、劇場等による公演、大学等の教育機関の学生等が自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催の教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等付属の研修所等の発表公演は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や団体等の来日公演は「海外団体公演」となる。

従って、「国内団体」の研修所公演は、「教育研究団体」とした。例えば、新国立劇場公演は「国内団体」であるが、新国立劇場オペラ研修所公演は「教育研究団体」に分類している。

（団体数について）

一つの団体が他団体と共同制作などを実施した場合は、その団体が単独で実施した場合とは区別し、別の1団体としてカウントしている。また、同じホールが組む相手を変える

表1　分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、巻末に公演記録を掲載）

	1．国内団体	2.教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演　　＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等	分析記事（6．演奏会形式など）、公演記録有		

などで構成が変わった場合などは、他の制作組織としてカウントもしている。例えば、(公財)石川県音楽文化振興事業団が、東京芸術劇場（(公財)東京都歴史文化財団）と共同制作した《こうもり》は、1つの制作団体（グループ）によるものとして数え、同じ（公財）石川県音楽文化振興事業団が（公財)高岡市民文化振興事業団等複数の組織と共同制作した《滝の白糸》は、別の1つの制作団体（グループ）によるものとして数えている。

2. 日本のオペラ公演2014年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2014年は、毎年分析対象としているA表とB表をあわせた総上演回数が1,061回となった。これは、2012年の1,117回、さらに2013年の1,139回よりも少ない数字である。また、2014年に上演活動を行った団体数は283団体となり、2012年の277団体よりは若干増えたものの、総上演回数の減少に伴い2013年に比べると減少した。

大規模会場での公演は2012年が490回、2013年も493回でほぼ同数だったのが、2014年は約50回減の444回と、大きく変化した。中・小規模会場での公演は2012年に627回、2013年は646回に増えたが、2014年は617回と、大規模会場ほどではないにしろ減少している。

図1　総上演回数と活動団体数の推移

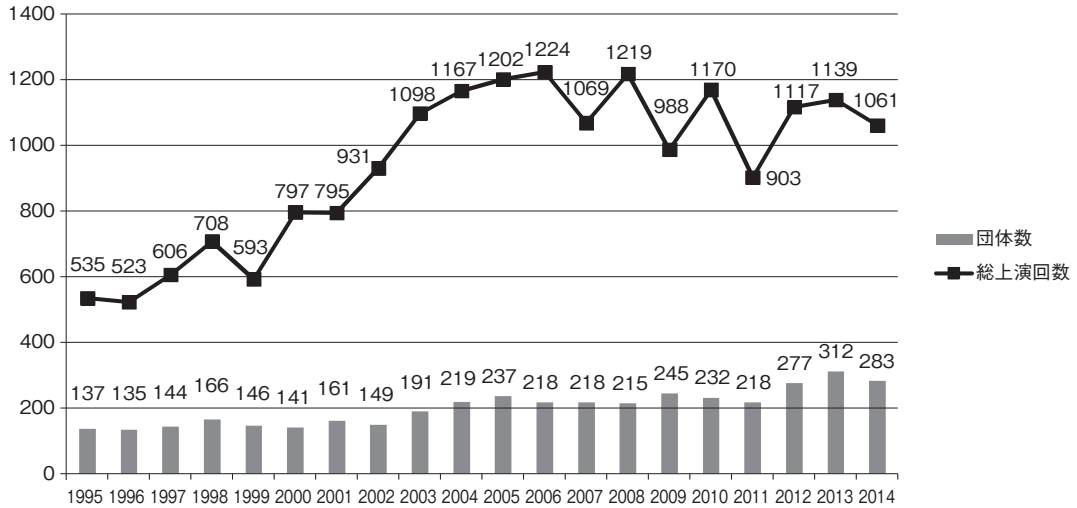


表2　2014年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

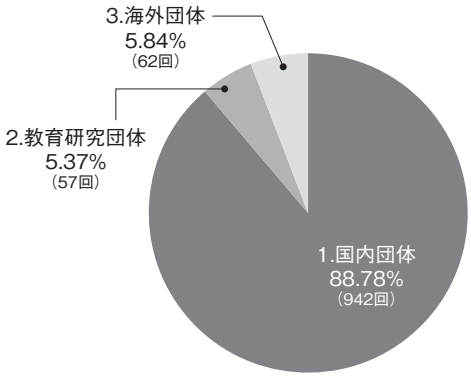
A．大規模会場（756席以上）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	113	353
2.教育研究団体	11	31
3.海外団体	4	60
合計/総団体数・総上演回数	128	444/1061

B．中・小規模会場（756席未満）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	159	589
2.教育研究団体	15	26
3.海外団体	1	2
合計/総団体数・総上演回数	175	617/1061

合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数＊	総上演回数
1.国内団体	254	942
2.教育研究団体	24	57
3.海外団体	5	62
合計	283	1061

＊団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2　各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



国内団体に関しては、2012年は249団体による978回、2013年は274団体996回と増加していたのが、2014年は254団体による942回となった。オペラ公演を実施する団体が新たに増えてきていた近年の傾向が、少し和らいだかのようでもある。歌手たちが集まり、自力で公演したりする小規模な公演などが増えていた傾向が収まりつつあるのだろうか。しかし、A表に分類されている、各地の劇場やオペラ団体等が継続的に実施する大規模な公演が、前2013年にくらべて26回減、中・小規模公演が28回減とそれぞれ減少しているので、理由については、細かく見ていく必要がある。

教育研究団体は、2012年は23団体による61回、2013年は29団体による62回、2014年は24団体による57回で漸減となった。教育研究団体は、大学、劇場や団体の研修所などの分類であり、団体数が急激に増減することは考えにくく、ほぼ同様の数字が続いている状況である。

海外団体は、2011年は7団体の74回、2012年は5団体による78回、2013年は9団体で81回、2014年は5団体で62回と、2010年以前に比べて減少傾向が続いている。2010年が10団体で126回公演だったのが、2011年の東日本大震災をきっかけに、公演回数が大きく減少したままなのである。2012年以降、来日する団体の数にかかわらず上演回数は微増傾向だったのが、2014年は団体数も公演数も大幅に減らすという結果になった。2014年が、海外団体による大型の来日公演が重なるような当たり年ではなかったということはあるものの、震災以降激減した来日団体数と公演数がそのまま回復していない状況にあるのは事実である。

2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3は、2014年に大規模会場で10回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめたものである。

例年国内の大規模な公演を行う団体の中で最も多くの公演を実施してきた東京二期会は、前年に引き続き最も多くの大規模な公演を実施したものの、2014年の総上演回数は16回と、前2013年の23回から減少した。これは、継続的に実施してきた神奈川県民ホールとびわ湖ホール、さらに東京二期会等による共同制作公演が2014年には行われなかったことも影響した。同年が神奈川県民ホールの改修の年にあたったことが理由である。

東京二期会は、その結果、主催公演として行った4演目《ドン・カルロ》《蝶々夫人》《イドメネオ》《チャールダーシュの女王》の各4回、合計16回公演が2014年の実績となった。このうち《ドン・カルロ》はフランクフルト歌劇場との提携公演、《イドメネオ》はアン・デア・ウィーン劇場との共同制作による上演であり、《蝶々夫人》は栗山昌良演出舞台の再演、《チャールダーシュの女王》は田尾下哲による演出・日本語台本とそれぞれ具体的な特徴をもった内容となった。さらに田尾下は、（公財）五島記念文化財団のオペラ新人賞研修成果発表としての舞台でもあった。

（公財）日本オペラ振興会には、藤原歌劇

団と日本オペラ協会との2つのオペラ団体がある。そのうち、藤原歌劇団は1934年の設立から80年の節目の年を迎え、《オリィ伯爵》を2回、「川崎・しんゆり芸術祭2014 ArteRiccaしんゆり」で《魔笛》を1回、《蝶々夫人》を3回、25周年を迎えたオーチャードホールで《ラ・ボエーム》を3回と、合計で9回の公演を実施した。さらに日本オペラ協会は、「日本オペラシリーズNo.74」として《春琴抄》を3回公演した。

びわ湖ホールは、大ホールでの公演として《死の都》を2回、《リゴレット》を2回、自主制作公演した。加えて、《ホフマン物語》《ラインの黄金》を中ホールで、さらに《天国と地獄》を「平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業　地域大連携オペラ創造プロジェクト」として、地域の大学等と連携して公演を制作、自らの劇場外の地域のホールで3回公演実施するなど多彩な事業展開とした。さらに、自主制作オペラ公演の実施やアウトリーチ等の大小様々な公演機会に、オーディションにより若手歌手を選んで組織し

表3　2014年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	アルレッキーノ	2	51	5	152	203
	おぐりとてるて	0		6		
	シグナルとシグナレス	0		1		
	セロ弾きのゴーシュ	0		6		
	ねこのくにのおきゃくさま	1		1		
	ネズミの涙	12		7		
	ピノッキオ	0		17		
	まげもん―MAGAIMON―	23		7		
	よだかの星	3		24		
	銀のロバ	2		28		
	吾輩は猫である	0		6		
	森は生きている	8		44		
東京二期会	ドン・カルロ	4	16	0	0	16
	蝶々夫人	4				
	イドメネオ	4				
	チャールダーシュの女王	4				
藤原歌劇団*2	オリィ伯爵	2	9	0	0	12
	魔笛	1				
	蝶々夫人	3				
	ラ・ボエーム	3				
日本オペラ協会	春琴抄	3	3			
びわ湖ホール	ホフマン物語	2	8	0	3	11
	死の都	2				
	ラインの黄金	2				
	リゴレット	2				
	天国と地獄	0		3		
兵庫県立芸術文化センター	ちゃんちき	2	10	0	0	10
	コジ・ファン・トゥッテ ～女はみんなこうしたもの～	8				
上位5団体合計上演回数／総上演回数	—	—	97/444	—	155/617	252/1061

＊1　大規模会場で10回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演を含む。
＊2　藤原歌劇団と日本オペラ協会は、（公財）日本オペラ振興会として、同一組織にあるオペラ団体。そのため、1団体として数えた。

表4-1　2014年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1～2月	カルメン	G.ビゼー	5	2013/2014 SEASON《カルメン》	全3幕/字幕付原語上演
1～2月	蝶々夫人	G.プッチーニ	4	2013/2014 SEASON《蝶々夫人》	全2幕/字幕付原語上演
3月	死の都	E.W.コルンゴルト	5	2013/2014 SEASON《死の都》	新制作/全3幕/字幕付原語上演
4月	ヴォツェック	A.ベルク	4	2013/2014 SEASON《ヴォツェック》	共同制作：バイエルン州立歌劇場/全3幕/字幕付原語上演
5月	道化師	R.レオンカヴァッロ	6	2013/2014 SEASON《道化師》	新制作/全2幕/字幕付原語上演
5月	カヴァレリア・ルスティカーナ	P.マスカーニ	6	2013/2014 SEASON《カヴァレリア・ルスティカーナ》	新制作/全1幕/字幕付原語上演
5～6月	アラベッラ	R.シュトラウス	5	2013/2014 SEASON《アラベッラ》	全3幕/字幕付原語上演
6月	鹿鳴館	池辺晋一郎	4	2013/2014 SEASON《鹿鳴館》	全4幕/字幕付　中劇場（プレイハウス）
7月	蝶々夫人	G.プッチーニ	6	平成26年度 新国立劇場高校生のためのオペラ鑑賞教室	全2幕/字幕付原語上演
10月	パルジファル	R.ワーグナー	5	平成26年度（第69回）文化庁芸術祭主催公演 2014/2015シーズンオープニング公演 2014/2015 SEASON《パルジファル》	新制作/全3幕/字幕付原語上演
10月	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	5	平成26年度（第69回）文化庁芸術祭協賛公演 2014/2015 SEASON《ドン・ジョヴァンニ》	全2幕/字幕付原語上演
11~12月	ドン・カルロ	G.ヴェルディ	5	平成26年度（第69回）文化庁芸術祭協賛公演 2014/2015 SEASON《ドン・カルロ》	全4幕/字幕付原語上演
—	11作品	11人	60/444	—	—

表4-2　2014年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
11月	夕鶴	團　伊玖磨	2	平成26年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ 平成26年度　新国立劇場　高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演	全1幕　主催：尼崎市/(公財)尼崎市総合文化センター/新国立劇場 会場：あましんアルカイックホール　普及公演事業
—	1作品	1人	2/444	—	—

た、「びわ湖ホール声楽アンサンブル」の所属メンバーや、過去に同アンサンブルに在籍していた若手歌手などを積極的に起用していることが特徴でもある。

兵庫県立芸術文化センターは、「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2014」で、《コジ・ファン・トゥッテ～女はみんなこうしたもの～》を8回上演した。さらに、同ホールと堺シティオペラの共同制作公演として、團伊玖磨作曲の《ちゃんちき》が2回公演実施された。これは、堺シティオペラが自主制作し、すでに上演実績のあるプロダクションである。

オペラシアターこんにゃく座は、震災のあった2011年には222回と若干落ち込んでいたのを、2012年と2013年は242回と数字を戻したのだが、2014年は203回へと減少した（こんにゃく座オペラ塾の発表公演として実施された《変身》2回公演を除く）。

このほか、表3には含まれないが、文化庁の「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」の助成を受けて実施された大規模な公演は、東京二期会と日本オペラ振興会の主催公演のほか、関西二期会の《こうもり》と《ドン・カルロ》、関西歌劇団《ラ・ボエーム》、堺シティオペラによる既述の《ちゃんちき》や《黄金の国》、東京オペラ・プロデュース《ミレイユ》《戯れ言の饗宴》など、各団体の方向性を示したものが並ぶ結果となっている。

表4-1、4-2では、新国立劇場が自らの会場で実施した公演、さらに劇場外公演について取り上げている。

新国立劇場の主催公演のうち、新制作は4つのプロダクション。3月に《死の都》を新制作して5回上演、5月に《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《道化師》を6回ずつ、さらに2014/2015シーズンのオープニングとして、10月に《パルジファル》を5回上演し、大きな話題となった。

新国立劇場が劇場外公演として実施した兵庫県尼崎市での《夕鶴》は、前年と同様に2回公演であり、「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」として、あましんアルカイックホールで行われたものである。

ところで2014年は、大規模な公演での演目の重なりが指摘された年でもある。《蝶々夫人》は、1年の間に東京二期会、藤原歌劇団、そして新国立劇場の三者による本公演、および新国立劇場の「高校生のための鑑賞教室」でも取り上げられた。さらに特に話題になったのは、《死の都》公演が同じ年の同じ3月に、間をあけずに新国立劇場とびわ湖ホールで取り上げられたことである。上演機会の少ない作品だけに、偶然とはいえ、驚きの声が上がった。

2-3. オペラ公演への助成制度

前項のとおり、国内オペラ団体等による公演には、複数の助成制度が活用されている。以下、2014（平成26）年に国が実施した助成の中で、特にオペラ公演に関係するものを整理した。

（オペラ団体への助成）

各地のオペラ団体が主催、実施している大規模なオペラ制作への補助金には、2-2で述べた「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」が挙げられる。これは、文化庁の補助金を、（独）日本芸術文化振興会を通じ、我が国の舞台芸術の水準を向上させる牽引力となっている芸術団体が行う舞台芸術の創造事業に対して助成するものである。同補助金の中でも、「年間活動支援型」助成を受けているオペラ団体は、（公財）東京二期会と（公財）日本オペラ振興会（藤原歌劇団、日本オペラ協会）の2つ。東京二期会が実施した合計16回公演と日本オペラ振興会が実施した合計12回公演は全て「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸

術創造事業）」の助成を受けており、二つの組織それぞれが、同補助金において特に認められた「年間活動支援型」による助成団体として活動、我が国のオペラ界を牽引する役割を担っている。このほか、「公演単位支援型」での助成を受けているのは、（公社）関西二期会、特定非営利活動法人関西芸術振興会（関西歌劇団）、堺シティオペラ（一社）、（有）オペラシアターこんにゃく座、東京オペラ・プロデュースである。結果として、東京二期会、日本オペラ振興会等を含め、計8団体（堺シティオペラ単独公演を1団体、さらに堺シティオペラと兵庫県立芸術文化センターの共同制作を1団体とした）による合計61回が、同補助金を受けて公演実施されている。

さらに、（独）日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金に「現代舞台芸術創造普及活動（音楽）」が設定されており、オペラ団体に対しては、地域のオペラ公演活動の核となっている組織の活動が助成を受けた。首都オペラの《アラベラ》、四国二期会の《魔笛》などが助成対象となった。さらに、各地域で活動するオペラ団体の中には、同振興会の同じ基金のうち「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けている場合もある。沖縄オペラ協会の《ドン・カルロ》などがその例である。この他に、学校等への巡回公演として、文化庁が「次代を担う子どもの文化芸術体験事業（巡回公演事業）」（平成25年度まで）、および「文化芸術による子供の育成事業―巡回公演事業―」（平成26年度から）を実施しており（同事業では、アーティストの派遣事業なども実施）、オペラシアターこんにゃく座やアーツ・カンパニーなど複数の団体が、同助成を受けて各地域での学校公演等を行っている。

（劇場・音楽堂等への助成）

各地のホール等が主催して実施された劇場型オペラ制作には、平成25年度から開始された文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業」が活用されている。これには、「特別支援事業」枠で採択されている兵庫県立芸術文化センター、びわ湖ホールのほか、「活動別支援事業」枠での採択によるアステールプラザの「ひろしまオペラ・音楽推進委員会」によるオペラ公演事業などがある。また、同事業には「共同制作支援事業」の枠が設けられており、（公財）石川県音楽文化振興事業団および東京芸術劇場（（公財）東京都歴史文化財団）による《こうもり》が制作された。この他、新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」での《夕鶴》公演や、ジャパン・アーツが企画制作した《夕鶴》公演の一部は、文化庁「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」事業で助成が行われたものである。

また、（独）日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金による助成には、「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演活動」があり、川西市みつなかオペラ《清教徒》や伊丹市民オペラ《赤い陣羽織》《子供と魔法》など、各地域の文化施設等を運営する組織主催の、オペラ公演活動に対して助成が行われた。

これら国からの助成金以外に、地方自治体、さらに民間財団等からの助成なども活用されている。こうした補助金や基金助成などは公演実施の成否を握るカギともなっている。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2014年は57回と、2013年の62回からわずかに減少した。しかしながら、各音楽大学のオペラ公演、劇場や団体が運営する研修所などが、多様な公演を定期的に行っている状況は変わらない。

こうした教育研究団体による上演回数は比較的安定している。平成25年度に開始された文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」による補助事業のほか、芸術文化振興基金の「地域文化施設公演・展示活動：文化会

館公演活動」は、複数の大学オペラ公演にも活用された。

教育研究団体公演で取り上げられる作品は、学生や卒業生など若い歌手たちが出演することもあって、モーツァルトなどのアンサンブル作品を上演する傾向が強いことも例年どおりである。

2-5. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2010年に126回行われていたのが、2011年の東日本大震災の影響を受けた結果、73回へと激減して以来、上

表5　2014年の教育研究団体公演活動データ*

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
大阪音楽大学	魔笛	W.A.モーツァルト	2	4	0	0	4
	THE TELEPHONE	G.C.メノッティ	1				
	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	1				
国立音楽大学	かしこいリス	N.ロータ	1	4	0	0	4
	運転教習所	N.ロータ	1				
	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2				
洗足学園音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	4
	友人フリッツ	P.マスカーニ	2	2	0	0	
焼津中央高等学校合唱部	カルメン	G.ビゼー	4	4	0	0	4
新国立劇場オペラ研修所	ナクソス島のアリアドネ	R.シュトラウス	3	3	0	0	3
東京藝術大学	コシ・ファン・トゥッテ ～女はみんなこうしたもの～	W.A.モーツァルト	3	3	0	0	3
6団体合計上演回数 /総上演回数	10作品	6人	—	22/444	—	0	22/1061

＊大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が3回以上ある団体。大規模会場での総上演回数順、合計および50音順の掲載。学生主催公演など有志による公演などは含めない。

表6-1　2014年海外団体*の公演活動データ（A.大規模会場）

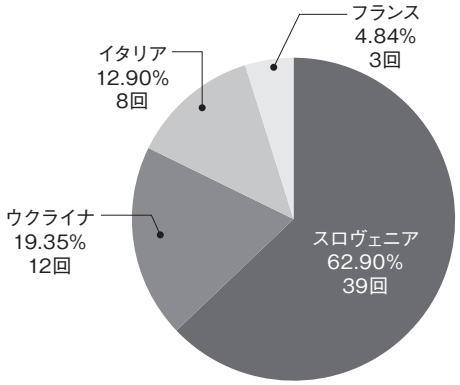
上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催地（都道府県数）
5月	イタリア	ローマ歌劇場	シモン・ボッカネグラ	G.ヴェルディ	3	6	1
			ナブッコ	G.ヴェルディ	3		1
6～7月	スロヴェニア	スロヴェニア　マリボール国立歌劇場	カルメン	G.ビゼー	21	21	16
7月	フランス	フランス国立リヨン歌劇場	ホフマン物語	J.オッフェンバック	3	3	1
10～11月	スロヴェニア	スロヴェニア　マリボール国立歌劇場	アイーダ	G.ヴェルディ	18	18	12
12月	ウクライナ	ウクライナ国立歌劇場	トゥーランドット	G.プッチーニ	7	12	4
			アイーダ	G.ヴェルディ	5		5
—	4ヶ国	4団体	6作品	4人	60	60/444	26都道府県

表6-2　2014年海外団体*の公演活動データ（B.中・小規模会場）

上演月	国名	劇場・団体名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催地（都道府県数）
9月	イタリア	ボローニャ歌劇場フィルハーモニー	蝶々夫人	G.プッチーニ	2	2	1
—	1ヶ国	1団体	1作品	1人	2	2/617	1府

＊劇場名は、主催者表記に準じる。

図3　2014年海外団体の公演（全62回）・所属国別割合



演回数の点では減少したまま横ばいとなっている。

2014年に行われた5団体の公演のうち、ローマ歌劇場、フランス国立リヨン歌劇場、ボローニャ歌劇場フィルハーモニーの3団体が「拠点型」公演（4都市以下での公演）を11回行った。「巡回型」公演（5都市以上での公演）では、スロヴェニア・マリボール国立歌劇場が6～7月と10～11月の2度にわたる来日で合計39回公演を行ったのをはじめ、ウクライナ国立歌劇場の12回公演をあわせて、2団体が51回の公演を実施した。

イタリアのローマ歌劇場は、リッカルド・ムーティ指揮によるヴェルディの《ナブッコ》《シモン・ボッカネグラ》を3回ずつ計6回公演し、フランスのリヨン歌劇場は、大野和士指揮によるオッフェンバックの《ホフマン物語》を3回公演して、それぞれの歌劇場の特徴をしっかりと前面に出した。

「巡回型」の公演形態をとるマリボール国立歌劇場は《カルメン》を21回とりあげた6月からの全国巡回公演と、《アイーダ》を18回とりあげた10月からの全国巡回公演とで、上演回数を重ねた。ウクライナ国立歌劇場は、《トゥーランドット》を7回、《アイーダ》を5回、それぞれ日本各地で公演した。

海外団体による公演は、2014年に27都道府県で行われ、国内団体や教育団体の公演に加えて、各地域に広くオペラ鑑賞機会を提供している事実は2014年においてもゆるぎない。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2014年に登場した指揮者は、日本179人、外国人32人となった。2013年の日本人190人に比べると減少しており、外国人は2013年が38人だったので、これも減少した。

日本人のうち、大規模会場での公演活動を中心に行った指揮者は、以下のとおりである。現田茂夫が《夕鶴》を9回、小﨑雅弘が鹿児島オペラ協会の《フィガロの結婚》、京都オペラ協会の《コジ・ファン・トゥッテ》などで合計9回、樋本英一が日本オペラ協会の《春琴抄》3回、沖縄オペラ協会の《ドン・カルロ》2回などで合計8回の公演を振った。

さらに、佐渡裕が兵庫県立芸術文化センター《コジ・ファン・トゥッテ》で8回、飯守泰次郎が新国立劇場の《パルジファル》5回と名古屋二期会の《こうもり》2回とで合計7回、沼尻竜典が、びわ湖ホールによる《死の都》と《リゴレット》の公演で各2回ずつ計4回と藤原歌劇団の《ラ・ボエーム》3回の計7回を振っている。加えて、沼尻は、演奏会形式で、自作の《竹取物語》を1回、《ナクソス島のアリアドネ》を2回振っている。

中・小規模公演にも範囲を広げると、松井和彦が自身の作曲した作品を振って26回となった。これは、西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」《花咲かじいさん》、名古屋二期会の《羊飼いと狼》《金の斧・銀の斧》によるものである。そのほか、アーツ・カンパニーの公演で佐々木克仁が18回を数えた。

外国人のうち、「拠点型」公演の指揮者では、リッカルド・ムーティがローマ歌劇場公

演を合計6回振っている。レナート・パルンボは12回となったが、これは新国立劇場の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》の各6回公演を加えた結果である。さらに、以下の指揮者は全て新国立劇場に登場し、各作品を5回ずつ振っている。アイナルス・ルビキスは《カルメン》を、ピエトロ・リッツォは《ドン・カルロ》を、ベルトラン・ド・ビリーは《アラベッラ》を、ヤロスラフ・キズリンクは《死の都》を、ラルフ・ヴァイケルトは《ドン・ジョヴァンニ》を振った。

このほか、「巡回型」公演では、マリボール国立歌劇場公演を21回振ったロリス・ヴォルトリーニを筆頭に、同じくマリボール国立歌劇場を18回振ったフランチェスコ・ローザのほか、ウクライナ国立歌劇場の公演でミコラ・ジャジューラが12回などとなった。

（演出家）

2014年、演出家は日本人171人（含む団体、再演演出家3人を除く）891公演、外国人は23人（再演演出家2人は除く）139公演となった（残りの公演は演出家をたてずに行われている）。この数字にはいずれも、共同演出をした者を含めており、再演演出家は含めていない。日本人は2013年の182人からの減少となり、外国人も同年の32人から減少している。

日本人演出家のうち、大規模公演の演出数では、中村敬一の24回が多くなった。このうち、15回が大規模会場で、9回は中・小規模の会場での公演である。びわ湖ホールでの《ホフマン物語》の2回、《天国と地獄》の3回のほか、関西二期会の《こうもり》2回、沖縄オペラ協会の《ドン・カルロ》2回、さらに大阪音楽大学、国立音楽大学などの教育研究団体での演出も多い。

23回となった岩田達宗は、石黒晶作曲の《みすゞ》2回、三善晃作曲の《遠い帆》2回、青島広志作曲の《黄金の国》2回といった日本のオペラ作品演出を行っていることが特徴である。そのほか、「ひろしまオペラルネッサンス」の《カルメン》2回、藤原歌劇団の《ラ・ボエーム》3回公演が大規模な会場での演出となった。次は、19回の三浦安浩である。新国立劇場オペラ研修所の《ナクソス島のアリアドネ》3回のほか、名古屋二期会の《こうもり》2回などが主な演出舞台となった。

この他、オペラシアターこんにゃく座の「巡回型」公演を中心とした演出で、大石哲史が84回（うち、共同演出が2回）となったほか、鄭義信が《まげもん》や《ネズミの涙》などで51回となっている。

外国人演出家では、フィリップ・アルローが、新国立劇場による《アラベッラ》の5回公演、「巡回型」公演を行ったマリボール国立歌劇場の《カルメン》21回で、合計26回を記録した。デイヴィッド・ニースは「小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXII」で《フィガロの結婚》を4回、兵庫県立芸術文化センターの上演で《コジ・ファン・トゥッテ～女はみんなこうしたもの～》を8回、さらにサイトウ・キネン・フェスティバル松本での《ファルスタッフ》4回で合計16回となった。ジルベール・デフロは新国立劇場での《カヴァレリア・ルスティカーナ》6回と《道化師》6回の合計12回となっている。

また、そのほか「巡回型」公演を行った中では、マリボール国立歌劇場公演によるピエール＝フランチェスコ・マエストリーニ演出の《アイーダ》が18回となったことが目立つ。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2014年は、海外の作品の上演回数が607回となった。2012年の636回から2013年は677回となっていたことから、大きく数字を減らした。日本の作品の上演回数は、2012

表7　2014年 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回

＊（　）内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

表8-1　2014年に日本で上演された海外のオペラ作品
（大規模会場での上演実績のあるもの、全87作品中・上位18作品、タイトルは便宜的に統一）

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	カルメン	G.ビゼー	42	20	62
2	蝶々夫人	G.プッチーニ	24	14	38
3	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	13	22	35
4	アイーダ	G.ヴェルディ	28	0	28
4	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	10	18	28
6	ヘンゼルとグレーテル	E.フンパーディンク	5	20	25
7	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	15	9	24
8	椿姫	G.ヴェルディ	15	8	23
8	魔笛	W.A.モーツァルト	14	9	23
10	こうもり	J.シュトラウスⅡ	13	9	22
11	カヴァレリア・ルスティカーナ	P.マスカーニ	8	7	15
12	ドン・カルロ	G.ヴェルディ	14	0	14
12	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	7	7	14
14	愛の妙薬	G.ドニゼッティ	3	8	11
15	道化師	R.レオンカヴァッロ	7	3	10
16	トゥーランドット	G.プッチーニ	9	0	9
16	電話	G.C.メノッティ	3	6	9
16	メリー・ウィドウ	F.レハール	2	7	9
合計/総上演回数	—	—	232/444	167/617	399/1061

表8-2　2014年に日本で上演された海外の作曲家
（全44人中、上位11人）

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A.モーツァルト	102
2	G.ヴェルディ	95
3	G.プッチーニ	91
4	G.ビゼー	62
5	E.フンパーディンク	25
5	G.ドニゼッティ	25
7	G.C.メノッティ	22
7	J.シュトラウスⅡ	22
9	P.マスカーニ	19
10	F.レハール	13
10	R.シュトラウス	13
合計/総上演回数	—	489/1061

年の481回から2013年に464回へ、2014年は454回へとさらに減少した。海外の作品は2013年の99作品から87作品へとこれも減少したのは上演回数と連動した格好だが、日本の作品は2013年の83作品から2014年は84作品へとほとんど変化がないのは、「巡回型」公演の1作品あたりの上演回数が減少したケースがあるからである。総上演回数の変化には、作品の取り上げられ方にも多少の影響が出ている。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

海外の作曲家によるオペラ作品のリストをみると、2014年は、ビゼー作曲の《カルメン》が62回と、群を抜いた上演回数により、1位になった。新国立劇場、スロヴェニア・マリボール国立歌劇場等がとりあげた他、喜歌劇楽友協会、ひろしまオペラルネッサンスなど、各地の国内団体が上演したことが要因である。この他、上位5位までに、モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》、プッチーニの《蝶々夫人》《ラ・ボエーム》、ヴェルディの《アイーダ》といった上位常連作品が並んだ。《コジ・ファン・トゥッテ》は、兵庫県立芸術文化センターのほか、名古屋二期会、関西二期会等の研修所公演等でとりあげられたことで数字を伸ばしている。また、プッチーニの《蝶々夫人》は、新国立劇場のほか、藤原歌劇団、東京二期会が公演したことに加えて、北九州シティオペラ等地域のオペラ団体が取り上げたことが、公演回数が多くなった理由である。ヴェルディ作品のうち最も公演回数が多かったのは《アイーダ》で、これはマリボール国立歌劇場、ウクライナ国立歌劇場の巡回公演が行われたことによる。その他、2014年は同じくヴェルディの《ドン・カルロ》が14回公演されたことが目立つ。同作品は、新国立劇場、東京二期会のほか、創立50周年記念公演として取り上げた関西二期会、ヴェルディ作品に取り組み続けている沖縄オペラ協会などが上演したことによるもので、2014年の特徴の1つとなった。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

日本のオペラ作品の上演回数では、A表の

表9-1　2014年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場）　＊上演回数10回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	まげもん ―MAGAIMON―	萩　京子	23	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で7回公演あり
2	夕鶴	團　伊玖磨	12	3	ジャパン・アーツ/新国立劇場/つくばオペラ・安房おぺらの会	
2	ネズミの涙	萩　京子	12	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で7回公演あり
4	森は生きている	林　光	10	2	オペラシアターこんにゃく座/合唱団じゃがいも	中・小規模会場で46回公演あり
合計/総上演回数		―	57/444	―	―	―

表9-2　2014年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）　＊上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	森は生きている	林　光	46	2	オペラシアターこんにゃく座/ふくいEオペラプロデュース	大規模会場で10回公演あり
2	金剛山のトラたいじ	井上　正志	41	1	オペレッタ劇団ともしび	大規模会場で3回公演あり
3	銀のロバ	萩　京子	28	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で2回公演あり
4	あまんじゃくとうりこひめ	林　光	27	4	東京合唱協会/博品館劇場/港町オペラ座/山口室内オペラ工房	
5	羊飼いと狼	松井　和彦	25	2	名古屋二期会/二期会千葉ブロック	
6	よだかの星	萩　京子	24	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で3回公演あり
7	金の斧・銀の斧	松井　和彦	23	1	名古屋二期会	
合計/総上演回数		―	214/617	―	―	―

大規模会場での公演には、林光、萩京子、團伊玖磨の名前が並び、B表の中・小規模会場での公演には、同じく林光、萩京子のほか、井上正志、松井和彦の名前が挙がっている。中・小規模会場での公演数が多いのは、「巡回型」公演の形態をとりつつ、各地で鑑賞教室が行われていることによるものである。

A表とB表を合わせた作曲家別の上演回数では、萩京子が《銀のロバ》や《まげもん―MAGAIMON―》など複数の作品で142回、林光が《森は生きている》《あまんじゃくとうりこひめ》などの作品で101回となった。この他には松井和彦が《金の斧・銀の斧》《羊飼いと狼》《泣いた赤鬼》等の作品で55回などとなっている。萩京子作品はオペラシアターこんにゃく座が、林光作品はオペラシアターこんにゃく座を中心に複数のオペラ団体等が取り上げたこと、さらに松井和彦作品は、名古屋二期会を中心として複数の組織が取り上げていることが特徴である。また、2014年はジャパン・アーツの企画制作による《夕鶴》公演が、8都府県を巡回、9回公演したことが目立っている。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図4、表12-1、表12-2】

上演地域の分布は毎年少しずつ異なっているものの、東京都を中心とした首都圏に偏っている状況は変わらない。この項の分析では、オペラ公演開催が確認できなかった県が、毎年出てくる。2011年は福島県と佐賀県で、2012年は鳥取県、2013年は福井県と宮崎県だった。2014年は、高知県がオペラ公演空白県となった。ただし、A表とB表に分類される全幕公演が行われなかった高知県においても、藤原歌劇団による《魔笛》のハイライト公演が2回実施されていて、C表に掲載している。

2014年の上位10位を見ると、首都圏の東京、神奈川、千葉が上位を占め、他には大阪、愛知、埼玉、兵庫、広島が入り、多少の順位の移動はあるものの、ほぼ例年通りの開催状況になった。この他、茨城が9位、福岡が滋賀と同数で10位になっていることが目立つ。

東京は、2012年には455回だったのが、2013年は426回に減少、2014年は424回とほぼ横ばいであるものの、他を圧倒しての第一位である。

東京の公演回数がほぼ横ばいだった理由は、国内団体による公演数が2013年には365回だったのが、2014年は378回に増加したにもかかわらず、その一方で、海外団体の上演回数が、2013年は41回だったのが26回へと減少していることにある。海外団体の上演回数の減少が、国内団体の上演回数の増加とほぼ相殺できた格好だ。

この他に10位以内に入った都府県は、例えば、愛知県立芸術劇場、アステールプラザ等、大規模な公演が実施可能な会場があることが特徴である。さらに、音楽大学等の教育機関があること、人口が多く大規模な招聘オペラ公演等を実施しやすいこと、そして多くの大小のオペラ団体が活発な活動を行っていること等が継続的に上位にランクしている理由にあげられる。たとえば兵庫県では、兵庫県立芸術文化センターでの自主制作公演や、海外団体による大規模な公演に加えて、地域のオペラ団体による大小の公演などが毎年行われている。拠点となる会場がオペラ制作を行い、団体がその会場で活動していることが見えてくる。

表11では、大規模公演、中・小規模公演別の実施状況についてまとめた。福井県、奈良県、和歌山県、岡山県、長崎県で、大規模な公演が行われていない。これらの地域でのオペラ公演開催は十分に地域住民に周知されていない、さらに鑑賞機会が得られない状況にあるケースも少なからずあるだろう。オペ

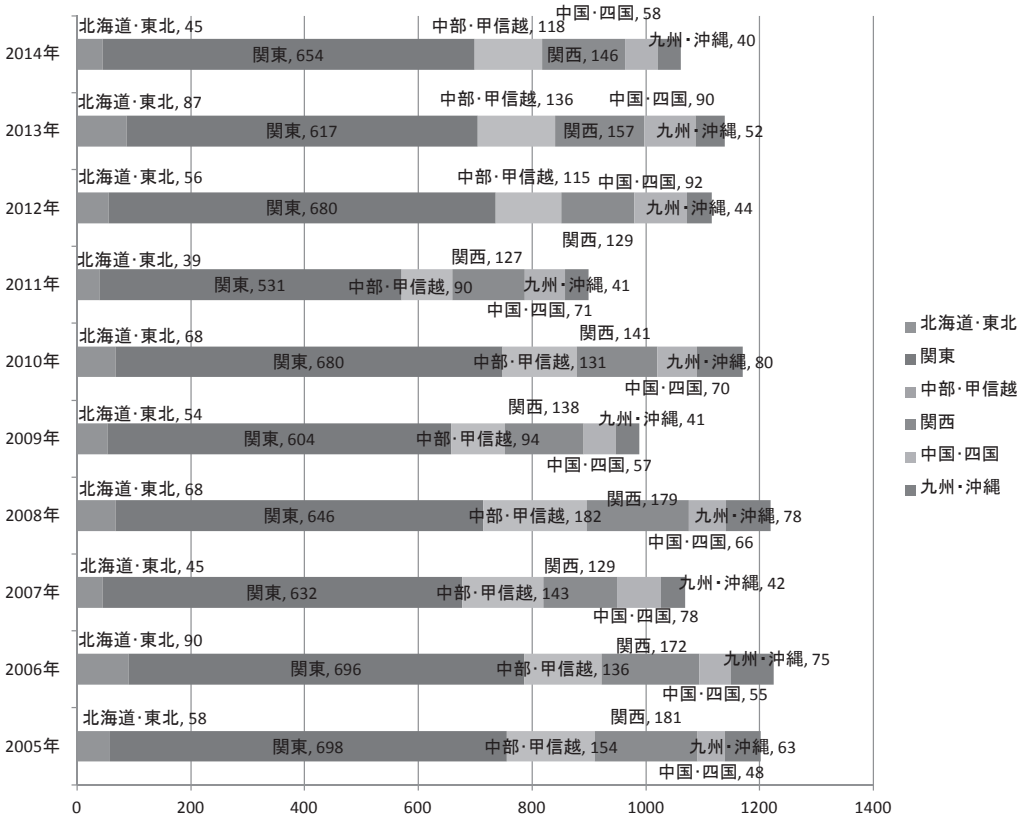
表10　2014年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	5	10	1	2	1	1	7	13	15
2	青森	2	3	0	0	1	1	3	4	33
3	岩手	1	2	0	0	1	1	2	3	39
4	宮城	4	10	0	0	1	1	5	11	17
5	秋田	2	4	0	0	0	0	2	4	33
6	山形	4	7	0	0	0	0	4	7	22
7	福島	2	2	0	0	1	1	3	3	39
8	茨城	4	19	0	0	1	1	5	20	**9**
9	栃木	4	15	0	0	0	0	4	15	14
10	群馬	3	10	0	0	1	1	4	11	17
11	埼玉	18	40	0	0	1	2	19	42	**6**
12	千葉	12	57	0	0	1	1	13	58	**3**
13	東京	105	378	8	20	4	26	117	424	**1**
14	神奈川	30	71	4	10	1	3	35	84	**2**
15	新潟	2	6	0	0	1	1	3	7	22
16	富山	2	4	0	0	1	1	3	5	28
17	石川	4	9	0	0	1	1	5	10	19
18	福井	1	3	0	0	0	0	1	3	39
19	山梨	3	8	0	0	1	1	4	9	20
20	長野	6	14	0	0	2	2	8	16	13
21	岐阜	4	6	0	0	0	0	4	6	25
22	静岡	6	8	1	4	1	1	8	13	15
23	愛知	9	38	5	8	2	3	16	49	**5**
24	三重	2	6	0	0	1	1	3	7	22
25	滋賀	5	19	0	0	0	0	5	19	**10**
26	京都	8	14	1	1	1	2	10	17	12
27	大阪	14	44	3	6	1	2	18	52	**4**
28	兵庫	15	34	2	4	2	2	19	40	**7**
29	奈良	2	6	0	0	0	0	2	6	25
30	和歌山	2	5	0	0	0	0	2	5	28
31	鳥取	2	3	0	0	0	0	2	3	39
32	島根	3	5	0	0	0	0	3	5	28
33	岡山	3	5	0	0	0	0	3	5	28
34	広島	8	25	0	0	1	1	9	26	**8**
35	山口	4	9	0	0	0	0	4	9	20
36	徳島	1	1	0	0	0	0	1	1	43
37	香川	2	4	0	0	0	0	2	4	33
38	愛媛	3	5	0	0	0	0	3	5	28
39	高知	0	0	0	0	0	0	0	0	—
40	福岡	8	17	0	0	1	2	9	19	**10**
41	佐賀	0	0	0	0	1	1	1	1	43
42	長崎	1	1	0	0	0	0	1	1	43
43	熊本	2	3	0	0	1	1	3	4	33
44	大分	2	4	1	2	0	0	3	6	25
45	宮崎	1	1	0	0	0	0	1	1	43
46	鹿児島	2	3	0	0	1	1	3	4	33
47	沖縄	2	4	0	0	0	0	2	4	33
合計	—	—	942	—	57	—	62	—	1061	—

表11　2014年の都道府県別・地域別総計

都道府県名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		上演回数比率	地域
	団体数	上演回数	団体数	上演回数	総上演回数	
北海道	2	2	5	11	4.24%	北海道・東北
青森	2	2	1	2		
岩手	1	1	1	2		
宮城	2	3	3	8		
秋田	1	1	1	3		
山形	2	4	2	3		
福島	2	2	1	1		
地域合計	—	15	—	30	45	
茨城	3	3	2	17	61.64%	関東
栃木	3	6	2	9		
群馬	3	5	3	6		
埼玉	8	19	12	23		
千葉	6	14	8	44		
東京	44	186	77	238		
神奈川	17	33	20	51		
地域合計	—	266	—	388	654	
新潟	2	5	1	2	11.12%	中部・甲信越
富山	3	4	1	1		
石川	5	5	1	5		
福井	0	0	1	3		
山梨	1	1	3	8		
長野	5	11	4	5		
岐阜	1	1	4	5		
静岡	6	9	3	4		
愛知	7	12	11	37		
地域合計	—	48	—	70	118	
三重	1	1	2	6	13.76%	関西
滋賀	4	11	2	8		
京都	6	8	5	9		
大阪	11	23	11	29		
兵庫	9	23	10	17		
奈良	0	0	2	6		
和歌山	0	0	2	5		
地域合計	—	66	—	80	146	
鳥取	1	1	1	2	5.47%	中国・四国
島根	1	1	2	4		
岡山	0	0	3	5		
広島	6	11	5	15		
山口	1	1	3	8		
徳島	1	1	0	0		
香川	2	4	0	0		
愛媛	3	4	1	1		
高知	0	0	0	0		
地域合計	—	23	—	35	58	
福岡	6	11	4	8	3.77%	九州・沖縄
佐賀	1	1	0	0		
長崎	0	0	1	1		
熊本	3	4	0	0		
大分	1	1	2	5		
宮崎	1	1	0	0		
鹿児島	3	4	0	0		
沖縄	2	4	0	0		
地域合計	—	26	—	14	40	
合計	—	444	—	617	1061	—

図4　地域別総上演回数推移（単位・回）



ラ実施における空白県でなくても、果たして十分なオペラ鑑賞機会が提供されていると言えるかどうか。数字の意味を良く考えなければならない。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。大規模会場のうち、新国立劇場は、2010年から2012年まで全く変動することなく70回だったのが、2013年には79回、さらに2014年には84回と増加した。これは、仙台市市民文化事業団他による《遠い帆》や東京二期会、日本オペラ振興会などによる公演が行われたことが理由である。一方で、東京文化会館は、2012年は41回、2013年には32回、2014年には16回と大幅に減少した。これは、東京文化会館の改修工事がこの年行われたことが影響している。兵庫県立芸術文化センターは、2012年は13回、2013年は11回と若干減少していたのが、2014年は14回に増加した。

この他の公演会場としては、びわ湖ホール、日生劇場、ザ・カレッジ・オペラハウス、アステールプラザの名があがった。さらに2013年にオーチャードホールの名前が10位以内に復活したのが、2014年は18回と2位になった。これは、Bunkamuraとして主催に加わったフランス国立リヨン歌劇場の来日公演をはじめとする海外団体の招聘公演14回と、藤原歌劇団の3回公演ほかによるものである。

6. 演奏会形式など

この他、C表に分類された公演、すなわち

表12-1　2014年の会場別総上演回数（8回以上開催のA.大規模会場、[　]内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	64	1	0	65	84
		新国立劇場中劇場	16	3	0	19	
		新国立劇場小劇場（中・小規模）	0	0	0	0	
2	東京都	Bunkamura オーチャードホール	4	0	14	18	18
3	東京都	東京文化会館大ホール	12	0	4	16	16
		東京文化会館小ホール	0	0	0	0	
4	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	11	0	1	12	14*
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	2	0	0	2	
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[1]	0	0	[1]	
5	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	7	0	0	7	11
		びわ湖ホール中ホール	4	0	0	4	
6	東京都	日生劇場	9	0	0	9	9
6	大阪府	ザ・カレッジ・オペラハウス	5	4	0	9	9
8	広島県	アステールプラザ大ホール	8	0	0	8	8*
		アステールプラザ多目的スタジオ	[4]	0	0	[4]	
合計／総上演回数		—	142*	8	19	169*	169*/444

表12-2　2014年の会場別総上演回数（15回以上開催のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	俳優座劇場	22	0	0	22	22
2	東京都	渋谷区文化総合センター大和田さくらホール	6	0	0	6	15
		渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール	9	0	0	9	
2	東京都	日暮里サニーホール ホール	9	0	0	9	15
		日暮里サニーホール コンサートサロン	6	0	0	6	
合計／総上演回数		—	52	0	0	52	52/617

＊該当する規模の会場の上演回数を合計した。表12-1大規模会場の総上演回数には、中・小規模会場での上演回数は含まれていない。

演奏会形式・コンサート形式での上演の他、部分的にカットして上演されたものを見てみよう。2014年には、こうした公演は322回以上記録されている。この中で大規模な会場で行われているものから、さらにいくつかの点で重要と考えられるものを整理してみた。

まず、オーケストラが自らの定期公演などで、オペラ作品を取り上げる場合を挙げたい。指揮者の得意とするオペラ作品などによる演奏会を行っている。NHK交響楽団は、オペラ作品を定期演奏会で取り上げてきているが、2014年の定期演奏会ではシャルル・デュトワの指揮によるドビュッシー作曲の《ペレアスとメリザンド》を2回公演している。この他、セントラル愛知交響楽団が丹波明の《白峯》を演奏会形式で初演し、関西フィルハーモニー管弦楽団は《椿姫》を演奏会形式で、さらに、飯守泰次郎指揮による《ジークフリート》を第3幕のみ取り上げている。

このほか、音楽祭における演奏会形式での上演にも注目したい。東京・春・音楽祭がマレク・ヤノフスキ指揮NHK交響楽団による演奏で《ラインの黄金》を演奏会形式でとりあげ、今後への期待をつないだ。ラモーの《プラテ》が上演されたのは、「北とぴあ国際音楽祭2014」においてである。寺神戸亮が指揮等を務め、レ・ボレアードにより演奏された。「サイトウ・キネン・フェスティバル松

本」では、「―青少年のためのオペラ―」と題して、《ヘンゼルとグレーテル》が取り上げられている。

また、バロック・オペラも複数取り上げられた。海外招聘団体によるものでは、《ポッペーアの戴冠》が、イタリアの古楽グループであるラ・ヴェネクシアーナによって上演されている。日本人が主体となった公演では、先の《プラテ》のほか、アントネッロが《ウリッセの帰還》を濱田芳通指揮、彌勒忠史志演出で抜粋上演した。

さらに、日本人の作品も演奏会形式でとりあげられている。既述の《白峯》の他、沼尻竜典作曲の《竹取物語》は2014年に演奏会形式で初演されたのち、2015年には舞台演出付の本公演が行われたケースであり、細川俊夫作曲の《大鴉》は、2012年にベルギーで世界初演されてから、2014年になって日本で初演されたケースである。

7. まとめ

東日本大震災が起こった2011年に、総上演回数が激減して以降、2013年までは徐々に総上演回数が増加し、2013年版の本項では、オペラ公演を取り巻く環境が好転したかのようであると述べた。だが、2014年は1061回と、総上演回数は2013年に比べて78回も減少する結果となった。

大規模な劇場型公演、あるいは大規模な公演を主催する組織による、団体型公演が継続して行われている状況は変化していない中、さらに劇場・音楽堂等との連携公演も増加していく一方ではないかとも思えた。しかしながら、そうばかりとも言えない状況が生まれている。

東京二期会の総上演回数の一部を占めていた、びわ湖ホールと神奈川県民ホールの協働による大型公演は、神奈川県民ホールが2013年12月2日から2014年9月末まで閉館して改修工事を行っていたことから、2014年は実施されなかった。2014年に東京文化会館での上演回数が減少したのも、大ホールは2014年6月1日から11月30日まで、小ホールでは2014年5月1日から12月11日までの期間、閉館して改修工事を行っていたことが影響している。

このように今、大きな問題としてクローズアップされているのは、これまで多くの公演が行われてきた劇場・音楽堂等が、改修工事、あるいは建て替えの時期にきているという事実である。このことによって、一定の、短くない期間、各地の劇場・音楽堂等が閉館を余儀なくされている。実は、国内団体の公演数が減少したことの要因には、公演会場の状況が影響してもいるのである。今後も全国の大小様々な施設の改修等が次々と予定されている中で、こうしたオペラ公演にも直接の影響が出てくることは避けられない。

また、海外団体による公演回数も下げ止まったままで、東日本大震災の直後に来日中止などが相次いで以降、数字が戻るきっかけを掴めていないかのような状況である。例年回数を重ねていた「巡回型」の招聘オペラ公演を行ったのは2団体のみ。こうしたパッケージ型上演形態に対する地域のニーズが変わってきたのであろうか。

現在、各地域の公共ホールは、指定管理者制度が2003年に施行されて以降、各地方公共団体が設置した公益財団法人などが指定管理者となっている場合も多いが、そのほかにも様々な業態の企業などがその任にあたっている。単独の企業が指定管理者となる場合もあれば、複数の企業が組んで、指定管理者の指定を受けるケースも多い。

こうした中で、指定管理者制度が、舞台芸術制作の現場に及ぼす影響は多大なものである。当初に比べて、やや長めの期間が設定されるようになってきたとはいえ、指定管理期

間が区切られている中で、企画制作に時間も費用もかかるオペラ公演を、具体的に計画することが難しい状況が生まれていることは事実である。

こうした状況のもと、用意された一定の公演パッケージを購入する方向に流れる傾向が少なくはないし、実際にそうした需要を満たす公演が複数見受けられるのも事実である。一方で、住民ニーズの充足は、単に鑑賞の機会提供にとどまらない。公演への参加、公演の出前、子どもたちへの鑑賞機会の提供など、多種多様である。こうしたニーズに応えられるような公演制作が可能な人材育成も必要になる。オペラ公演を通じた舞台芸術振興は、公演環境が変化する中、まだまだその手法も機会も開発の可能性があるのだと言える。

（本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。）